

学生とともに 一草創期を担って

瀧 博子

数ある大学のボランティアセンターの中で、立教大学のそれは、社会に「ボランティア」という言葉が定着するはるか以前から、学生・教職員が日常の中でボランタリーな働きをしてきた長い歴史に支えられています。とはいえ、ボランティアセンターとして発足したからには、大学として何が学生にとって大切か、立教大学(さらに立教学院総体として)のボランティアセンターらしさとは、という思いを胸に歴代スタッフは試行錯誤を繰り返してきたといえましょう。

わたしたちは活動を幅広く捉え、学生の目を社会に向けることから活動への糸口をつかんでもらいたい、と考えていました。本学の目指す「共に生きる」ことを考え、何かしら一人ひとりにできることをしてほしい、という願いと、今世界で問題になっていること、人が幸せに生きられる社会とは何かと考えた時に問題になること、そうしたことへの興味関心がボランティア活動の基礎にあると考えたからです。そして肩肘はってこれが「ボランティア」ということではなく、何げない「オヤツ？」から始める第一歩が大事、ということをつかみとってもらえたらと、プログラムの策定や広報活動を行っていました。

伝統ある宿泊プログラムの継承はもちろんですが、活動に参加した学生のみずみずしい感性にハッとさせられることが多く、そうした学生の反応を活かして新しいプログラムを作り、また学生たちの新鮮な声を届け、これまでボランティアの活動に関心のなかった学生を活動に誘うことに努めました。外部との密接な信頼関係に基づいた活動も、学生たちに安心して提供できるものですが、幸いに多くの校友や地元の方々との協力関係に助けられて進めてくることができました。学外で様々な人々に出会いその考えにふれることは、学生にとって新しい冒険でした。多くの刺激を受けてくる学生たちの目は輝いているのです。

ただ、ボランティア活動に参加する学生の底辺を広げることはなかなか難しく、授業をひとつの契機にできないかと、全学共通カリキュラムの総合 B 群(現主題別 B)に「ボランタリーアクティビティー」を開講できたことは大きな刺激になりました。また時を同じくして、長年行ってきた「手話」「点字」の講習会を、同じく全学共通カリキュラムの総合 A 群(現主題別 A)の「人権」に関する科目として開講できましたが、手話・点字を単なる技術としてではなく、それを使う人々のコミュニケーションの手段としてとらえる一歩を踏み出せた大きな節目となりました。幸い「手話」はその後「日本手話」として言語教育科目のひとつ(自由科目)になり、福祉系の学生のみならず全学生が受講できる日本で初めての大学となったのです。

「共に生きる」ことは人と人とのつながりを大切にしていくこと。そして2011年3月の東日本大震災を機に、1995年1月の阪神淡路大震災以来再びボランティア活動の重要性が日本全土で脚光を浴びました。本学でも多くの学生が東北への支援に出かけました。その多くは今までボランティアといわれる活動をしたことのない学生たちでした。現地で学生たちが感じたことの多くは人と人とのつながりでした。そしてその心をまた次に続く人に伝えていくこと、どのような場においても自分の知ったことを伝えることによって、より多くの人々に関心を向けていってもらえる、その広がりにつながりが本当に大切だと思います。これからも学生の若々しい感性を糧に、学生とともに歩むボランティアセンターを期待しています。

(元本学職員 2006年度～2012年度 ボランティアセンター勤務)